はし姫

宇治巻　一

哥しを名ごとり

[v.45]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 45
copy 1
Asian
Japan
Lage

LIBRARY OF CONGRESS

2004551302

50

そのころ世るうどまへられ給ふぬ古宮（ちうぐう）おりしけり。
（八宗のうまれ給ひ）
母（大臣ノ女之）なるなどもやむごとなくあれしまでまだらこと
なるべき荒くなどおりしける御時うつりて世中に
もしらるめられ給けるまゝぎれにまゝすくいとか
ごりなくれうしろこなども物うしゝ給しき
こゝろくまでこゝぐにつけて世間そむきさり
けるほやけはこゝろしまより所なくさしとられ
これはへるやうなりふのうもせうしの大臣のれ
むまめなりける衣（あはれ）にうろ（八宗ん）ばそくなやうちのなば
しまきてこゝろしさ後などさひいで給にうとしへ
なきことなほれどふるきれちぎりのふろなき

ぢうりぬうき世のるぐさめまてゝうたゝまるなく
女のこゝりしまり。年ごろふるゝ。此子も物し給
まぞこゝろもとなりそれば。さうぐしくつれ
づれなるなぐさめまゝいかでおりしかんちごもがれ
と。こゝやぞとまぐ思しの給けるゝ。先づらしく
姫君（ひめ 大宮と云之）のいとうつくしげなるひまれ海へりこれを
かぎりなく何くれとこひしづき望し給ふまゝる
さしつゞきそしきごとゝめて。これさびと男（おとこ）までも
なぐおぼしたるゝ。おなじ（又姫宮之中ノ宮と云之）さ海までこゝろかはは
し給なるべし。いと（小方）いたくひづらひてうせなめ。みや（八宮ハ）
おきましまておぼしまどふ。何りふるまつけて。

いとゞしくさしぐまるゝことおほかるせなれど
ことすぞゞろ秋なる人の哉(まつかぜ)音はことさら悲しけり。
けとゞめらるゝほどしまそこそすゞしきつれ。
ひとりとまりていとゞすさましくもおぼえきつれ。
いかゞなる人ぞとも。ひとりぞゝろそんほど。恨(うらみ)
上臈(じやうらう)こそいとおこがましうひとりなるべきこ
とくおぼしたちてはいもとげまほしう給
されど。姫(ひめぎみと)ゆづりひとりとかくてのこしとゞめんとい
ふかくおぼしけるひけくとし月もすれば。との
とのおもすけ給さり給ふくらのうけらしう
おくまほしきは。明(あけぐれ)鶯のれあすさぶまて。花乃

げうぞるしたまふ後(のち)にむまれ給し君(中宮)をば
さふし姫人ぞもいでやありふしうろうくるどうら
つぶやきて心にいれてもなつかひ男しざりなれど
(小方ノ)うぎりのさ後まて何(なにごと)定もおぼしつぎりし程
なぐらこれ(中宮ノ事)をいと心ぐるしとさひてさぐ此君(中)後ばが
うたうることなておくれとおぼさとがりこぐ一こと
なん家(八)にきてしさき給なればさき(八ん)の世のちぎりも
つきおりかしなれどさうべきまとそいあり
けめといまこと(小方)こしまでいと哀とさてうち
ろめたげにの給しほどおぼし出つこれ君(中)をし
もいとうるしうきけり給(そまつ)うたらなんまとにいかく

うけくしうゆくしきまでまれし給けるひ（大云）めぶ君も
ころぞせしづくよりしあるこまてこゝろ見まて
なしもけるくろくろまくさき海ぞしまへ分
いさしくやんごとなきしちぢいまきりていづれ
なもさ海ぐまさひしづき罪しまへどかるまぬこ
とおほくさし月まそへて分（八）のうち抱きびしく
のこなりまきろさふひし人もころぶなき心花
すまえしのびあへどけきぐましるがひて海
うぞちりけ（中）げぶのれめれともさろさはぶる
とかぐしきへなしもえりあへ海はざりそれば
（下らつちるめのとを云こ）
ほどまつけるまろあさまて（中）おさるまほどを

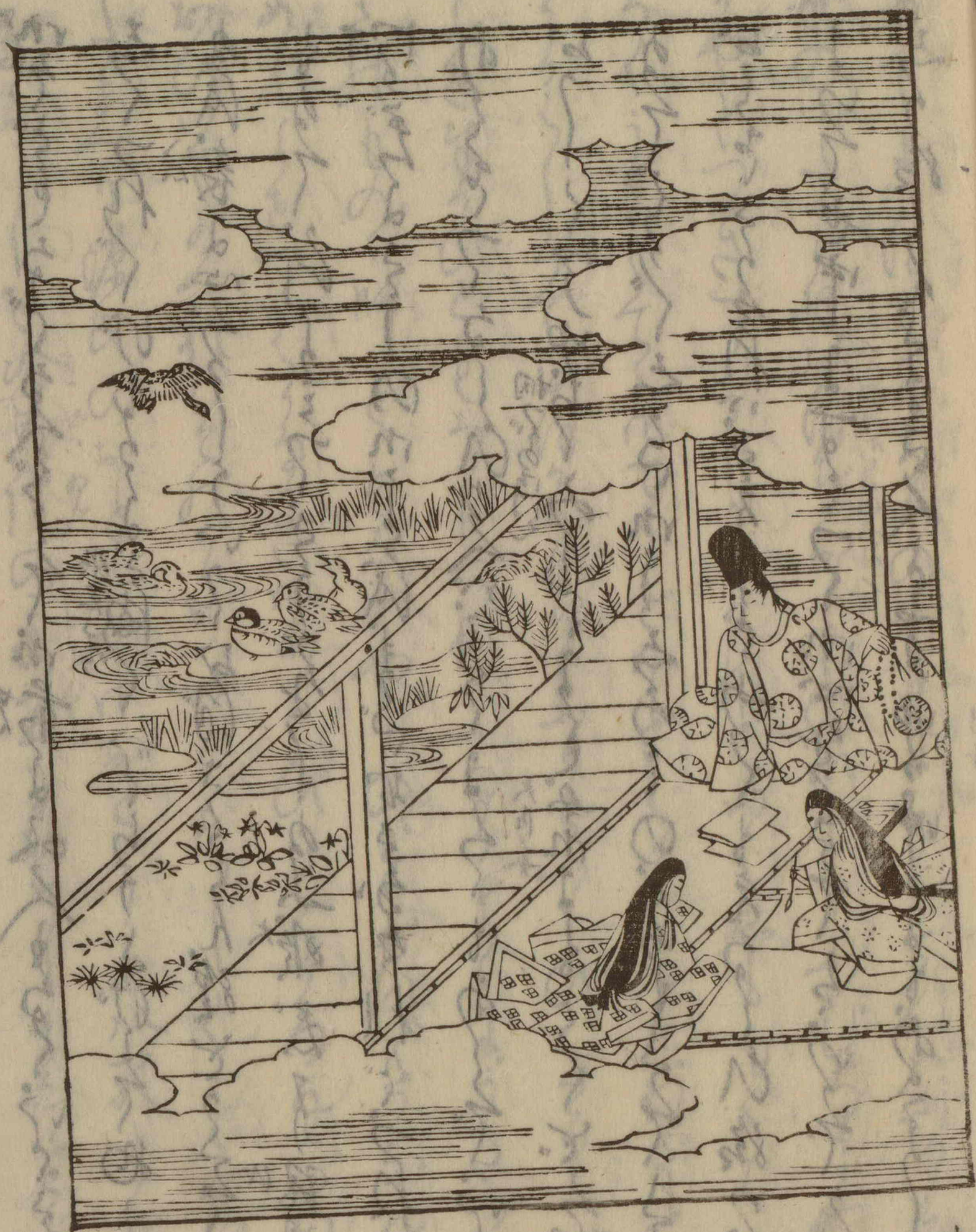
跡そてはらはれど、ぐづやぞくぐくとことまふ。
さすがはひろくおもしろき家のいけ山などの気色
などもむしなりてはてそいうちあれまさり侍
れくとなずめのふけいしまでもむなしくこさ
人もちかりされば、ちりつくろふひともあるとまゝ。
草のいほやかましぐり。軒のしのぶあれがかゝる
所々はうれけり。あきりくはつけうら茶もみちのい
うきもなをも。おちずこゝろにかゝりやし給ひしこそ。
ちぐさむしもかはりされ。ぶじくさびしく
あれつひかくいちまさ海くま指紅の風くさりちから侍
りきとさせるで。明られとこるひ給ひ。かうほとし

どもまうづらふぞ。そひのほうまろちあしうけが
心ちがらもうるもざりけうちがりとあばゆる紙ま
いてちまゝゝ世の人めいて。いまさらまとのこさし
月にそ人て世中とあばしもるれつゝ心ぞうり法
ひざりまちりもてゐて。故(こ)(ハノ和方)のうをあしとるるは
例の人ざ面ちうろうぞ人なまどこそふれまても
あばし出給はざりやりさまどゝ。ぢしもけうなく
ほどれうしひは。又世ましづひちまさやうまのこ
こそはあばゆべゝめれとありやれば。さ(ハノ内ノ人なと句)のこやは程
(又和方をまうけ給へとこ)
世人にちずしふ此心づうひをしあて。いとうくこ
ぐうしくこうぎちまさこやのうちまとのづら

もてあそぶくつぎもやとひとはもどきまえてゐる
れとつきぐしてまえごけことも。なかいまふれて
おほれど。公ちうしめしいれざりそり。れ念(おん)どのひ
まびまはいこれ。君(きん)どちをもてあそびやうく
およすけのへばことあるけり。碁(ご)うちへんつきなど。
もろきあそびつぎるつけてもこころざへどもは
こまり給ふ。大姫君はらうくしてふくともりうまえ
給。中ぶ君はおほどうまらうしげるさ面して。もれ
けくこしこうけとひ。いとうけくしうさ面ぐり
おとす。地(ぢ)のうらくるる日げよ。池の水鳥だれ。
こんこくしつゝ。をのがぞくさえげるこゑをどは

つれいとゝろすさことゝこ給しかどもづゞひたるれ
ぬほうしやましくなすがめまて。あぐらりれこと
どもとしへ男ゝ給いとおかしげるらいさきれほ
どるとりぐりさるしし給。もれく孫ども。衣る
おしくさゝぬれバおるゝぎとうけまて
ハうちすてつゞひさりましあるのかりれこの
せるさちをくれけん。こゝろげくしたりやと。
めをしのぐひ給ぞ地たちいとさまげるおりします
八女なり。年ばれをこゝろひるやをほそり給ましれど。
さてしもあてまたまゝめさて。志遣（えんぎち）をりしづさ給
れこゝろぐへるおなしのあへぐめるとさまて。志どけ

なされさ海いとくづしげるり。大姫君れすぐつとや
をしひさよをてるなしひのやうにうきまぜる後
八詞 これにうきゆへ硯（すゞり）にはうさつけざるりとてうみ
まりゆへ大 ばくぢしひてうさゆふ
大 いかでかくすぐちけるぞとおもふまもうさ水
るのちざりをぞしれよしのどそれありハ長
なりやうではおひさきこそてまぐよくもつぐけ給
もぬ程なりけ八詞 中 君もうさゆへとあれば中 いますうし
おさるげにひさしくうさ出ゆへり
中 おくくもくねうちさするさみなくハ日れ
ぞすもりになるべかりけり



れぞどもなどなんぞこそ。れ前(ぜん)は又人もなく。いとさび
たくつれぐげなるに。(姫志ノ言)さ雨ぐいとらうたげにて抱し
ゐ給。衣(ハム)は心ぐるしういかゞおぼさゞらん。強をうちては
ものて。行ふこつ。さうがをしゐふ。(大)姫君より(びハ)琵琶
(中)門ゐるさうのれことは。まだおさなかれどつねは
あるをつゝなしひゐへば。こゝにまくもあらぞ。いと
おかしく字ゆ。ちゝみ(桐つぼの御門之)どまも。女(大臣ノ女)れはもとくとくれ
ゐて。ちゝぐ。たゞされうたゞこの。とうもこそたゞ
おもをざりかれば。ざえなどゆくもえなしひ給ひ。
まして也中はすこつ。れ心をうてそ。いつでか仕
たり給ふんとうさ人と字ゆ中はもおさましう

おそよちはところかのやうよらくしられハかうこと

世のれうし也。おほちかたのれそうかむかしや（八ノ母女ㇾノ父大臣）

かやとつきすまじうられど。ゆく忍もかすくう

ちくうらしそて侭でうどもこでうるかん。わざし

うつしろそおほうえり。気のとかてひきこし心

よきなきひともちうしうれしくあまりまようこう

さみもの師ともちどやうのとぞくれしうかな

めしよきつくらるまされおそびまころをいれ。

おひそでのくれハぞみなるハいとおかしくもぐれ

さまへり。源氏のおほとゞのれおくうと八文とて

こさてしを。冷泉院の表家まおめしまたつとき。

朱雀院の御母后のよこさ海におぼしまゐて、この
文を世中にしらつゞざめべく、けがれとさきもてかし
づきまり給けるさらざるおいなく、河ゐるさ海のれ
ならしひにはさしくるゝれかるゝれだいよく
それはつゞざくにならりてぬる世にて、えまじらひ
給はず、又これ年ばかるひじるもりなりたてく、
今はかゞざりとよろづをおぼしすてたりゝ行に
ずこ給文やけるなり、いとゞしき世にあきましう
あへなくて、うけろひすこめべき所のよろしきも
なりなれば、宇治といふところにあるに山里も
しまへりけるにはたり給せてまへる世なれば

ヒハ

今ことすまとゝるれなんと衣はあげさうおじろの
けしひらくみくりしかりしこれのつくりまそ
しげかるさまかるもぬかるもあれどいかゞにせん
これもみぢ水のなかれにも心をやかたよりは
よきていたくしくながめ給よりかのとなしかく
さこもりぬるかも山の果にも出しの人(小方)もれ
し給いましかぐとゝおもひ出こさてしぬくぬおり
なりなり

八 こし人も宿(やど)もなりまなりましとなどそ
我身のさしありけんいけるかひなくぞ覚しこが
なやいとゞ山かさなれるはしとゝまとづれ来る

人まるしおやしさげてなどのおなるびこる山
がけどものこまれまなれまりつゝまける峯の
あさゝざりくるくおりなくてあしくし給ま
これうぢ山まひぢりぢちころかぢりすまやりざえ
いとかしこくて世のおぼしもうるかれど おさ
おさおほやけごとまも出つゝへずこもりゐるる
これ家のかくちうさ程ますまなてさびしきれ
き海まとうとさけざけきさせ給つ法文(ほうもん)などとよ
こなしひまへばこうとひ(あぎりん)ひつゝてつねまいる
年(ハノ)ばまるびしりまへるとどものふるさころを
とさくかきなりいよく山世のかりそめまあげさ

なきことは御門をしらせれば八詞ころづりいたちをも
うへまをひのぼりまごうなきに池にもとめべきは
いとかくおさなき人にせこすてん。うしろ先にさ
ぐりまなん。えひたちまかたちをもかへぬなど
へごてなく相語し給。これあざりは冷泉院にもし
さしくさしひて。此程などをしへきこゆる
人なりけり。京に出たるつゐでに来りて。れいのさる
べきかたちなど此らんじてどもを給ともある
つゐでに八宮のいとかしこうしらないけうの此ざえ。
さとりもかく相し給けるれ。さるべきまて生れ
かへる人にやもれしぬらん。心ありくせひをまし

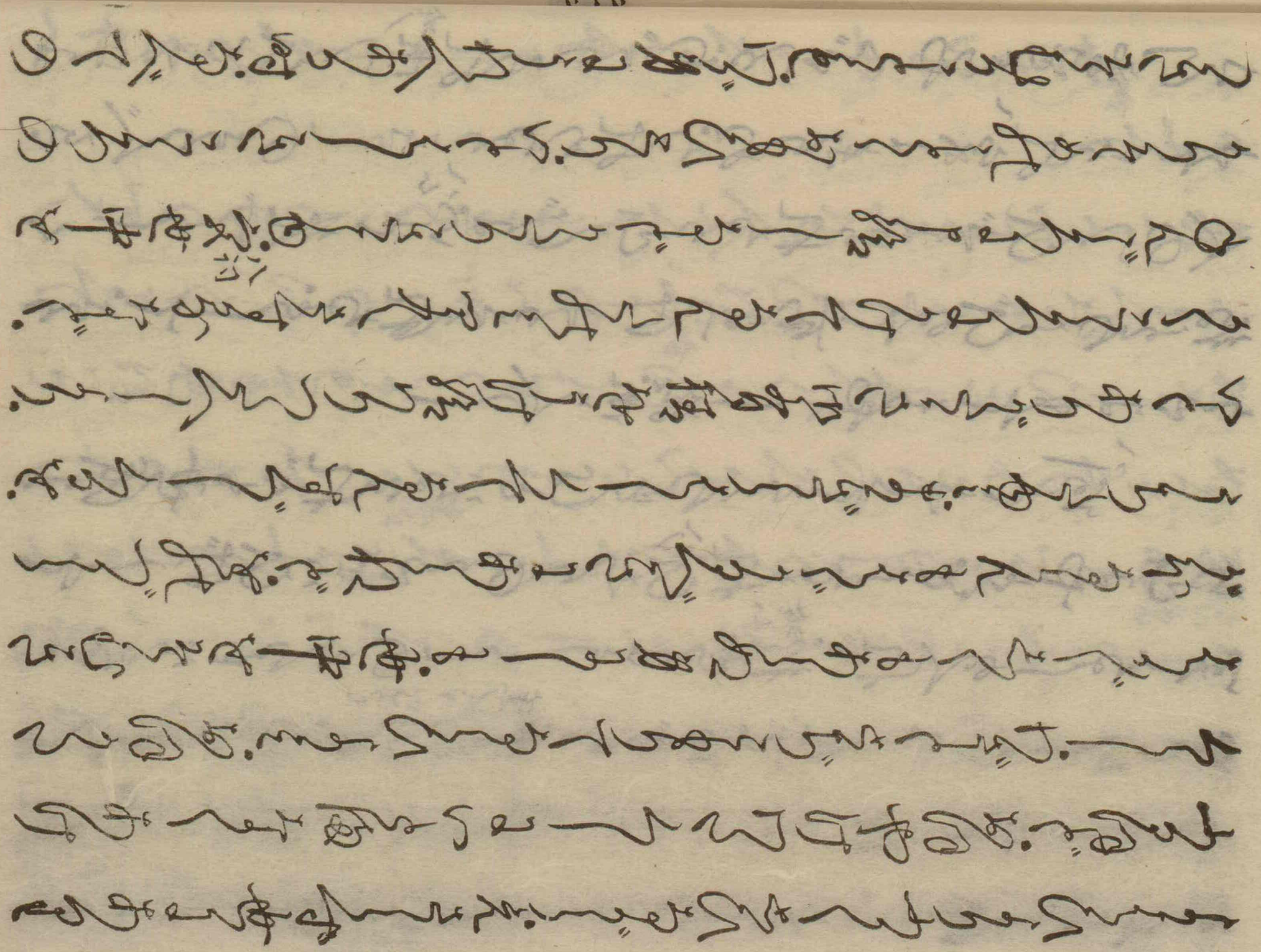
ふまへるほど。夜ことのひだりのをさてまなんこし
給とこそ由。いまだ（途河）ちかいりへなくずや。倍（ぞく）ひだり
とかこれ口うき人ぐのつけこゝろ。衣なることなり
などの給ひ寸。宰相（蓋）の中将も此前まさふらひなて。
我（蓋心）こそ世中をいとしさ海じくおもひたりながら
とこなひなど人まめとぐめらるゝがりいひとめず。
くちぬしくてすぐしかれなど。人たれどたひ川。
ぞくながらひだりまなり給こゝろのをさてやいい
まとこゝさぐめてこそ給。出家（あざり河）のこゝろざしは。もと
より此志なへるなどこゝろまさことまたひとぐこゝろ也。
いまとなりてハ心ぐりしき女子どもの此うゑ也

えおもひもてぬとなんぢげき作りぬふとそうす。
さすがよもおもく春めづらあざりまて。げまもしこの
姫君さちのことひきあくきてあそびぬへな。
河波ようきをひて罪も作りいとおもしろく極楽お
もひやれ作りやとこぶいよめづれば此門ほくゑ
ぬて。ざるひぢりのあくりよおひ出て。これ世のこと
ざ夜はこどくしりんとそしくらくとおり
しのことや。うしろめくしひもてがくもて
ワてしひぬんとおしもぐしもなくれんほどは。
ゆづりやはしぬくぬるどぞの給はする。これ院の
みしぐは十のこうよぞおもしけなすさく院乃。

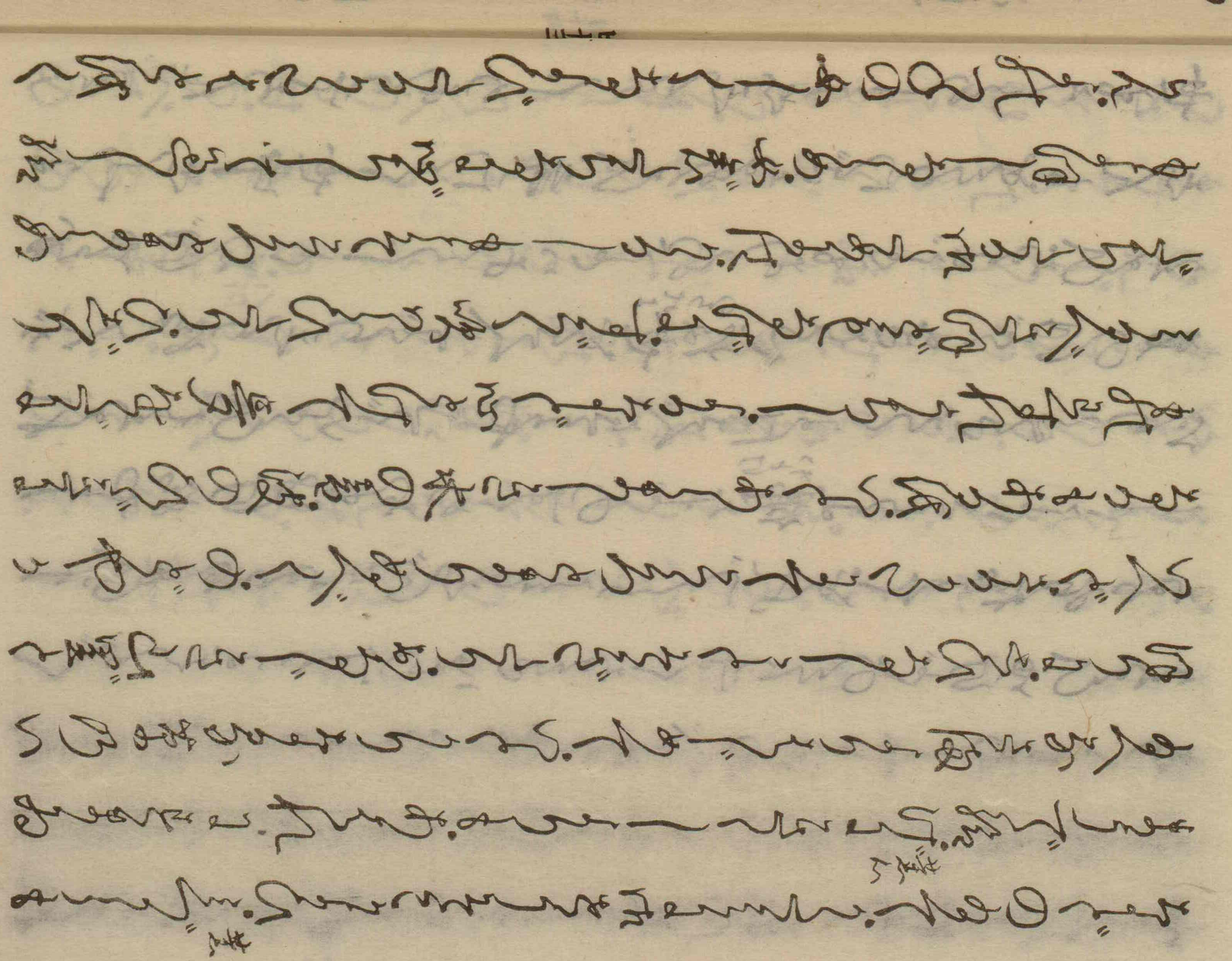
故六（ほ氏之）条院にあづけきこしめし。入道（女三之）のこやのは
しめしとおぼしいでく。かれ君ぞちとがな。つれぐ
なるあそびがたきまるぞ打おぼしかり。中将（薫ん）の君は。
なりくみこのおもひすましめんは心ぐんを。
対面（さいめん）してこまらぐやと。とふこころぞかくなり
ぬる。さてあざりのかりいるまも。かるすず（薫詞）まりて
抽ならひきこゆべく。まづうちくまも章色給ひ
こまへなどかたらひ給。みどいはことにくまて。
衣なるはすまねを。へづてまこくことなど罪し
のふて
世（冷）をいとふこころもやまかよへどもやへ

たり雲をまやへぐつるおぎりこれ(冷ノ)れつりひをさしたる
さてくうれ(八)宴は来りぬ。なれめるうさんのさるべき
人のつりひざは。まれなる山かげは(八ム)いと免づらしく
待よろこびなて。前まつけたるさられなどして。さる
うさはまてまやし給れり人し
(八)何とさてそろまむといたるれども世代う
ぢ山はやどをとそうれ(八)ひぢりのうをがひげして
罪なしなへれば。(冷ん)於世はうしこのうるもいるかと
いとおしくれらんず。何ぎり。中(蓋ノるすかちも)将の君のぐうしん
わげは地し給などくうりさしえて。法文などれ
そろえまほしきそろざしなん。いとけなりし

よもひよりふくせひながしえさしず世にあるを
ふるほど。おほやけワたくしにいと海なくあけ
そし。わざとさぢこもりてなしひよそ。おほうる
ちがぐしくもあしぬ身にしも。世中をそむき
がかなしんもちぐうるべきにあしれど。それづら
うちこゆ。まうぎしくてなんすづしくるを。
いとありがたさ。此有様をうけ給りつゝへしより。
くこころにかけてなんこれを罪えさすかなどぐ。
ゆんごろに給しなどかたりきこゆ。宮(八行)世中を
かりそめにとくおもひとりいとくしきこころの
つきそむうことも。ゆが身にうれへある時。なべての



世もうしめしうしたるたしめありてなん。ごくり
たんもをそろつぎなるめる。年ワく世中をふる
うるひ。なまごともあるぬことはあらじとおぼゆる
身のほどなさ。さたて。投世（のちれよ）をさへこどりたり給ふんが
ひりがこさ。こくなはさべきなや。こゞいとひもなれ
よとことさらな。佛（かとけ）などのすくめおもむけ給やう
なる有様にて。それづくしこそたげうるるおもひて
うるひゆけど。のうりすくなるさゆちするに。たうぐ
たくもあらぐ。ゆめべかるをとさしうこりたる。
さらにえこどる所なくおもひたらくをうへりてい
心をづくしげるる法の友にそてはれし給なれ



あしでいとよくの給ふす。ひぢりぢろ人（業ん世間ノ僧ノるすと云ニ）ざえある
法しなどハ世にあほかれど。あまりこはくしう
けどぬげるうしうとくの僧（そうぢ）都僧正（そうぢ）のさうく世に
いと面なくさすくまて。他の心をとひあらはさんも
とくしく見る給。又その人ならぬ佛のれでしの
いむことをさもつぢりのうとはあれどけはひ
いやしくことばぞこそこちるげにもれるれる。
いともれしくてひるかはあほやけどとりいと面
なくなどしつゝしめやかなるよひのほどけぢかさ
れ掛ぐこなどよめしいれかたしひ給ひりを。いと
ちすくに他むつしくなどのこあるは。いとあてに（ハノるすとかめ給ニ）

ころぐるしきさ夜ぞのときまひぢうとの〔?〕

あるじ佛のれをしへをもつぱらさとひたり

ひじりせうとくもよろこびきこえさせ給ひてはあり

ねどうき人ハまみて心をえのふくのぶとき

まれしのふかれど・や薫うくとられまりはちび

ぶまぶつ○まこゝそまつしまほしうて・ぶさまなか

くちざして・ほどなか時いあしうあはし給・薫これ

〔?〕のうきさうらひきこし・のへれバ冷泉院よりも

つねまれせうそこありて・宇治とのかも

おさらく思ひまかず・いうじくきびしげるりし

八 れすこりまやうく人めこゝろめてあらおりかへし

とつくひこさかし給ことといかめしう。これ君もまげ
さうべきことまつけつゝおりしきやうにもよめ
やうなるさ海にもこゝろよきつゝうまつり給こと。
ことせざりまゐりぬ。秋の末つゝ四季にあて
つゝし給ひ念佛(けんぶつ)を。此河づらいあじろのなことも
これどろいひとくこゝうしりましくまづゝなしぬを
とてこれあざりのとむ寺(てら)のごうにうけろひかて。
七日のほどとゝるひかふ。姫君たちはいと心ぼそく。
つれぐ海さりてなかめ給けるころ。中(芸心)将の君。ひさ
しくまいらぬかれとこひ出こさかし給けるまくに。
明(あうあけ)の月のかぶ夜かくさし出るほどに出たちて。

いとまびてれともまゝ人なるくやつれており
なり河のこゝろなれば毎なるともまづらもで此馬は
てゝりなりいりもてゆくまくまゝりゆこがりて
こちもこしぬしげまの中をわけまつるいとあら
もしこれのこさをひにほろくとおちこゞろく其乃
葉の露のちりくろもいとひやくりまひとやつ
なしずいくぬれぬぬくろありさるどもおさく
なしひこ海こぬこちまこゝろぼそくおしく
ぬぼこれなると
是
やまおろしまこ人ぬ其のもれ家よりもあや
なくもろき我なるこゞれ此がけのおどろへもうう

さしとてぞいぢんのとともをせまとぞさぐの
まがきをまけけ。そこしとなさ水のながれがを
かこしたく弱(こま)の行しとともなば思びてとよういい
しぬへるまがれなされ旬ひぞ風ましるがひて。
ぬししたぬりとゆどろくねざあれ家にぞ有けり
ちくなる月どまそれ(荒ん)ともきくつれぬもれく
ねどもいとすぐげまアカ。つね(ハ)まくあそび給と
きくをついでなくて。ふ(ハ)れれゆさんのまれ名うさ
もえきぬぞうしよきありなるべしとはもひけ
いりぬへが琵琶(びハ)のこ急のひぐきなりなり。づりしさ
てうましたべてよれつねのうきあらをなれど。

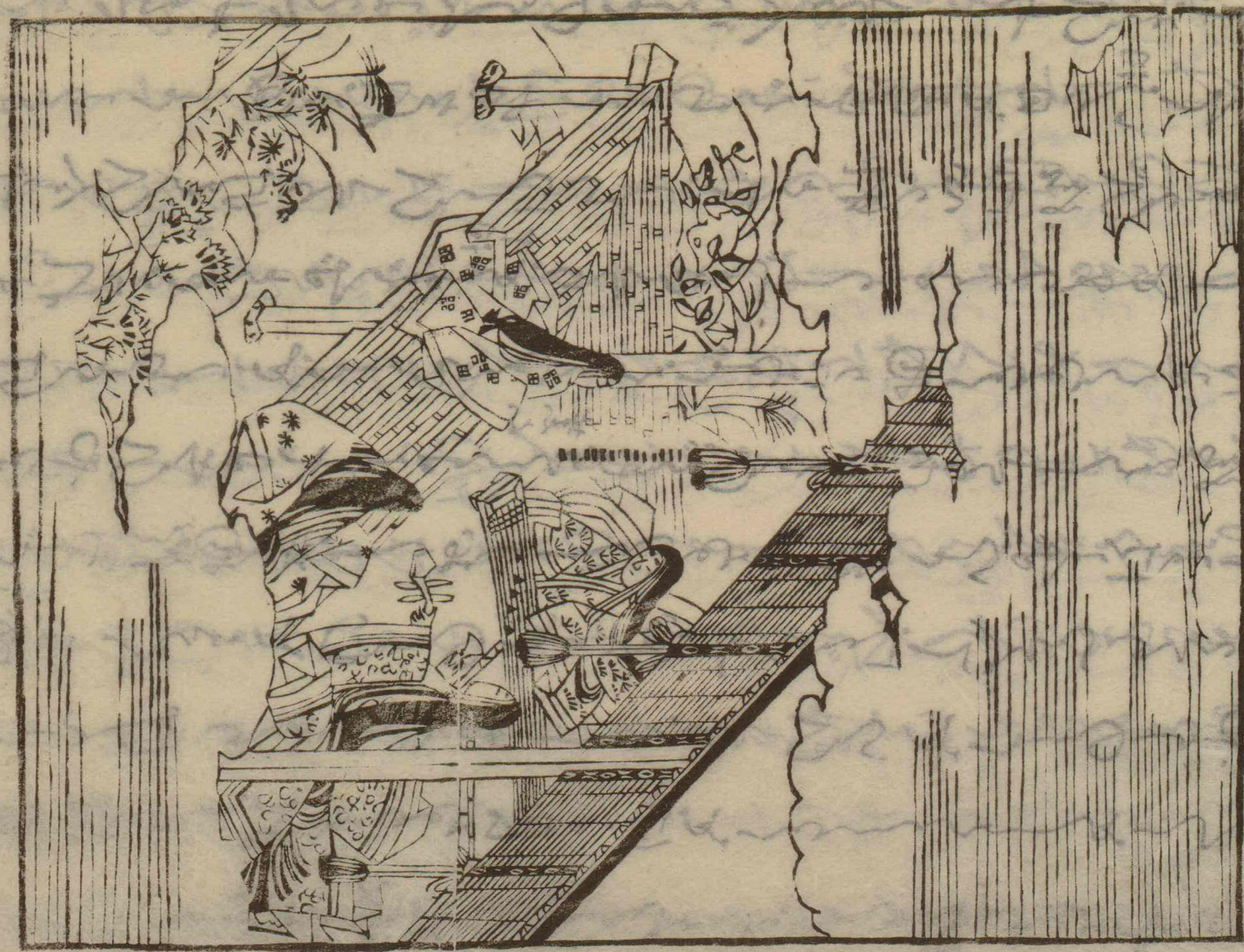
うらまやみくるれぬこゝろしてうきゑとぞうら
の音も抱きまげるおもしろしさりのこと衣は
なる夜めいろこゝ志をてこゝえぐ字也をぞしこゝ夜
ほしこゝる志のびさまへどれけとひ志るくこゝく
つけて夜ぬべめくおのてゐまりこゝく ましきいで
こゝろり志（夜ぬ詞）りくるんこゝりおもしまもれをう
そこをそ字しさせめとしすゐまりはしりかゞり（業詞）
ありれをこゝるひの程をおぎらしし字しさまんは
あいるしりくぬれく字りていゝづらまり魚らん
こゝれへを娘君のれりこゝまこゝして衣との絵りせば
るんゐぐさしべこゝとのこゝまへばこゝ（夜ぬ）くこゝほうら

あへてかやさせ給はんとて河風ふかしやとめし
しきて筆じろへづてまのこゝろてゆかしくおふ
けふこのひともとどうれしこさかりなかなしげしすこし
こらくられてまいるべきよみ人あるやうきらく
きしあそてまいりよくんはじこれこしやめめてく
ひとはいちくんとの給はれけるひかりからのさ
ふかるほしくきさこゝろみもしうとめでうくくうげ
あくあるはゆきいばひとさろめ時はあけられりくるん
おそろせどふもへまてもこゝやみれろうきりさ
りゆうかなし人給ひとさいひとともをさせ給はず大りくさ
くてをかんこらおりしますしとはりくきやめへ

なべてのひとまとせならじとおぼしの給へ
すらとまとばうちひておぢさるさ此もれ
ぐしなりしかのび給なれどこれ人有がらさ
せのゝめしまこさく出べかめるをとのまてなれ
しるべきよ我いすさぐしさころなどなさへぞ
くておりしますらん此有き海のおやしくげよ
なべてよおぼしめくぬなりとこまやりよのまへぞ
あるかしこ心なきやうよ後のきてや侍らんとて
あるさのおまへいらけのすいがいしら考てこれ
ぐてことなる我なしへよをこてまいれり此と
もれ人をよしのらうよよびすへてこれ家ぬべ

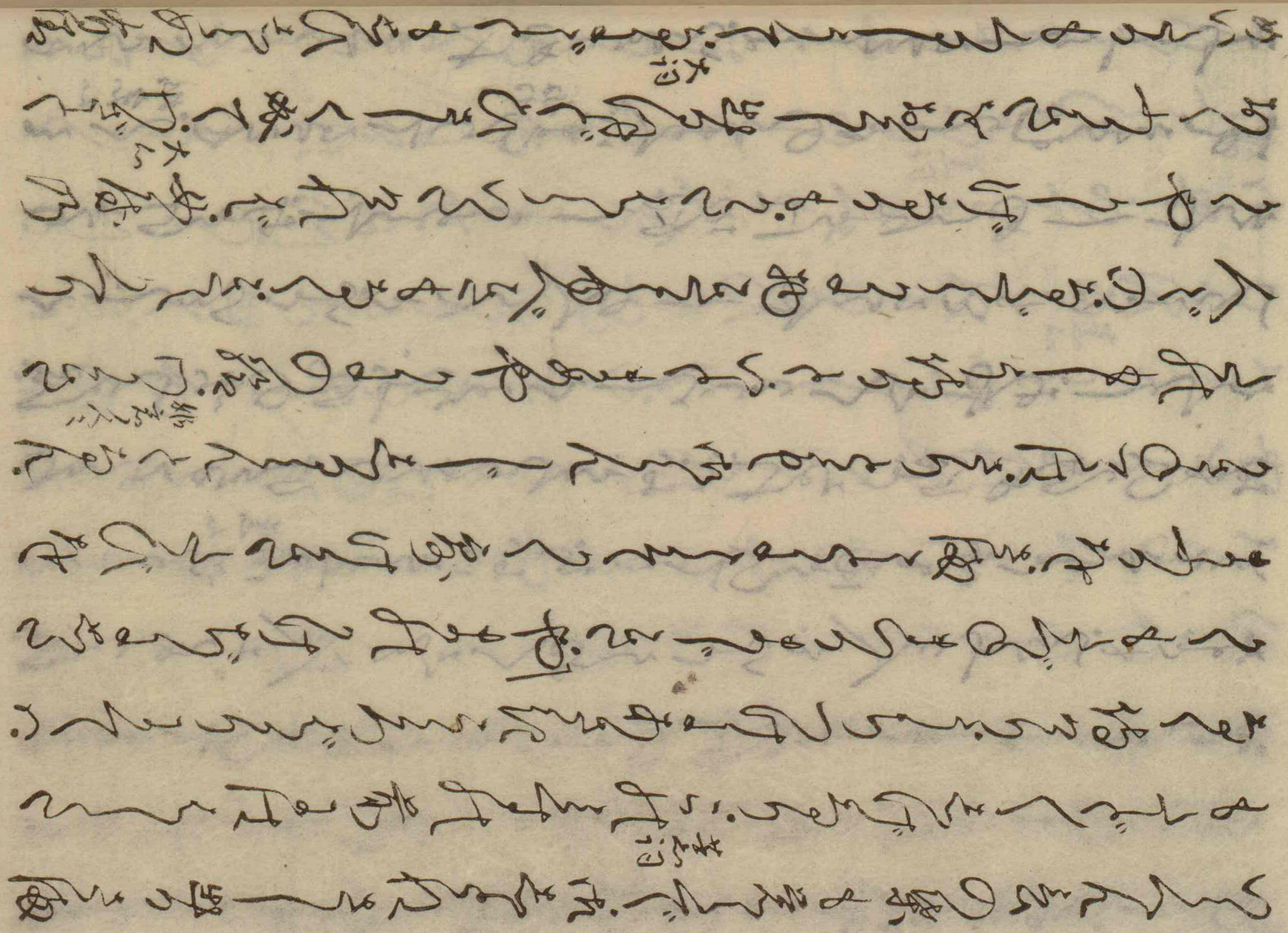
あへしふ（葉）おるさまよりふべかめるすいがいの中を
もそしをしあけてそこまへだ月おかしき
ほどよさりつれるをながめてすぐれとこじく
まさあげて人どねたりすれこまいとさむげに身
ほそくなへどめるつくひとりおるじさ雨なる
なれなどねたりうちなる人ひ（中）さりはよしらる
すうしねくれて蛇（びく）琵をまへまをさてだらぬ
てまさぐりましつゝねたるに雲がくれたりつる
月のよはかまいとあくさし出されば（中詞）扇なるで
これしても月はまゐきつべかりやうとてさし
のぞさたるほいとじくらうたげにねひやかなる

べしぞひめしうへいとのうへはよくめぐ
つまていつ日をかさねてこぢらへて有されば海ことにはし
むすび給ひ心あれとてうちうけてひとつ今す
らしきありけるよしつきうりどまずとたずねれは
はまさるまて抱りいあまざりきこととやうちとけ
の給ひしられけるひとぞもさしるままてまさひやうき
しまはまかひと表まちるとしうおかし書抱紙きこぎ
まゐりつきてうさまなどのむむときさくままめ
やうのこともいひうがしもわくざりけんとく
まうもてしうてきげる表ありしれく海有
べてみせありなりとぞうろかうつつめべし



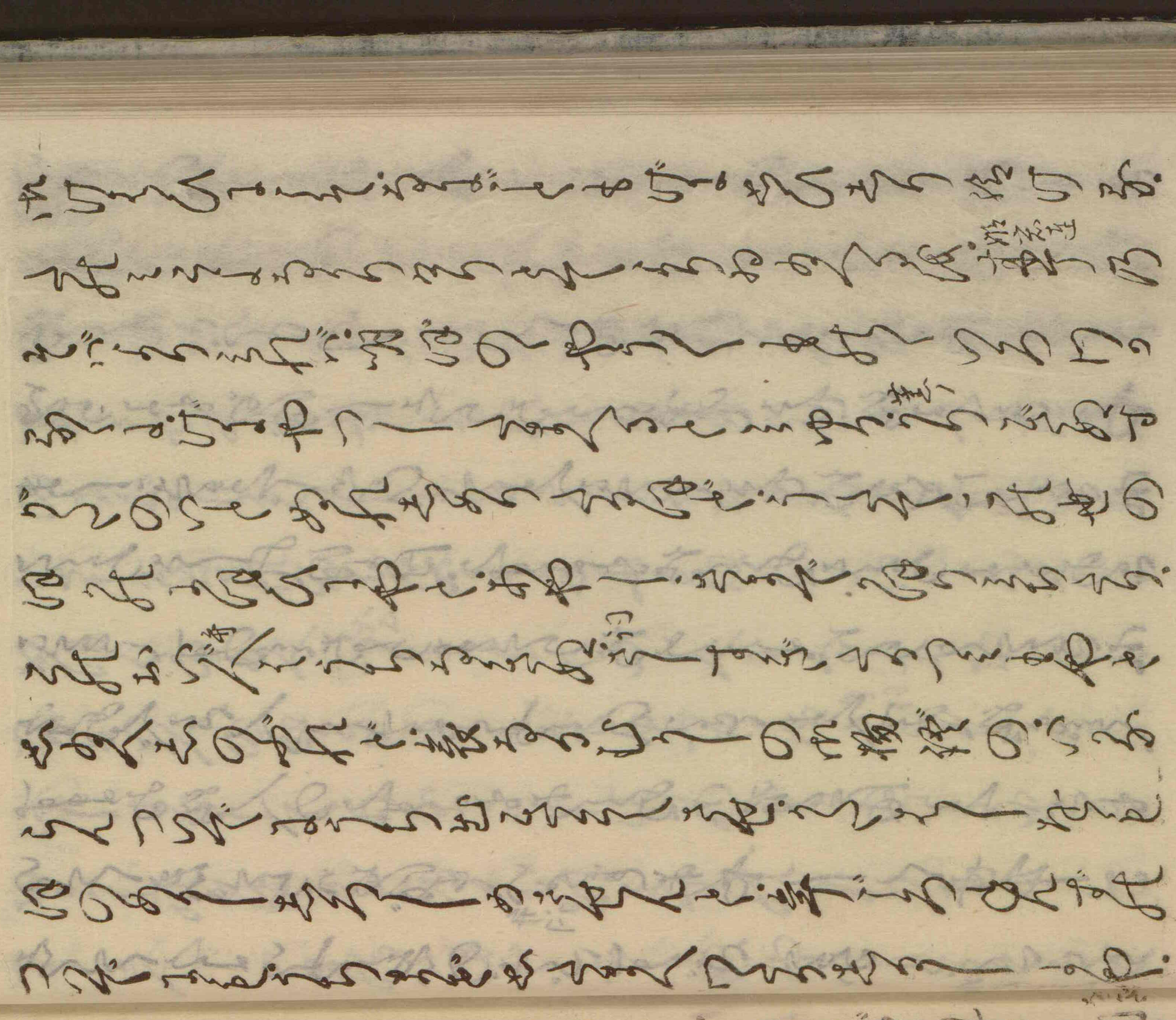
蓋ん
ちりのゝかれぞさやかりうゆゑくもあ
らぢ。まゝ月さし出なんとおぼしほどる。
おくのこゝよりも。人おもすくつげこゝゆゑ
ひとやあらんぞぞれおろしてこれいりぬ。おどし 姫志遠
ろきがほにはあらず。たまぐやかるもてなして。
やそうかれぬるけるひどもこゝぬのをとさず。いと
なるくかる心づかしうて。いとじうあてにこゝやびの
なる紙。おれ 蓋ん とおもひのふやをとゝろ出て。京に
は車ゐて来るべく。人もしらせぬ川おり川る
さぬ 数ぬ ひにおり 蓋詞 あしく来り侍るかれぞなかく
りけしくおもふことすくしなぐさめてなん。かく

まふふよしなきしよ。いたうぬれまゐる。うぐとも
まさきむりしとのうまへば。まつりてなきゐ。（殿ぬ）（姫宗ん）うくそ
えやしぬらんとはなほしもよろぐ。打とけたり
つうことぐもとなきやしぬへらんと。いというじく
ちづし。おやもしくうづしくまゐふ風の吹つる。
なもひかけぬほどなれば。おどろかざりけるこころ
をそさまく心も幽どひて。たちおいさうす。（蓋ん）はせうそこ
なども。つゐふ人もいとうぬくしき人なめる。
ありかしまこそよろげのことゆと。なもひてまゐ
なきりのまゐぎれなれば。ありつうこすのまへにおゆそ
いでくつゐ打給。やまぎ里びたろつ人どもなさし



なびくべうもあらぬころづよさまるん。をのづから
ふさしめしなりやうも侍りなすんづれぐと
のこすべし侍る。世の物語も異しさせ取またのこ
異しさせ。又りく世ごとなれてなりがめさせ。ゆふらん。此心
のまぎらさしにも。さしもおどろかさせ給げり
ふさえなれ侍らばいりまゐふさ後より侍らんなど
おほくのゆへ。べ大ん。つくましくいへまくて。おろし
つるおいべの世さしろまぞゆづり給。弁詞。さしへなく
さしすべしておかかうじけるやうこそらいさき
おまられさ後まも侍るかれ。こすれうちなりこそ
つきへごいまれくほどしさし思やうまこそなど。

しくくまいつゝ忌のさゝすぎさるもうゝくら
いくく忌ごちはおぼしいとゝあやしく世中は
すまぬ給人のうずまもあらぬれ有き海まてさも
有ぬべき人ごごまとふらひかどまへ給もこえ
こゝしずのこちりまきり給めるまゝ所りがらきれ
こゝろざしれほどは、うずまも給ぬこゝろまもおき
ましこさまでしひこまへきてさせ給るとけりきれ
ゆちまもおぼしたりるがら、宇丸させ給まくきまや
給らんとゆゝしけるまゝ抱なれたりもなる海まくき
もれからけるひいたり人めきてらしあるこゝ忌なれば
いとゝ河ごとしたるぬこゝちしけるまゝうれしき



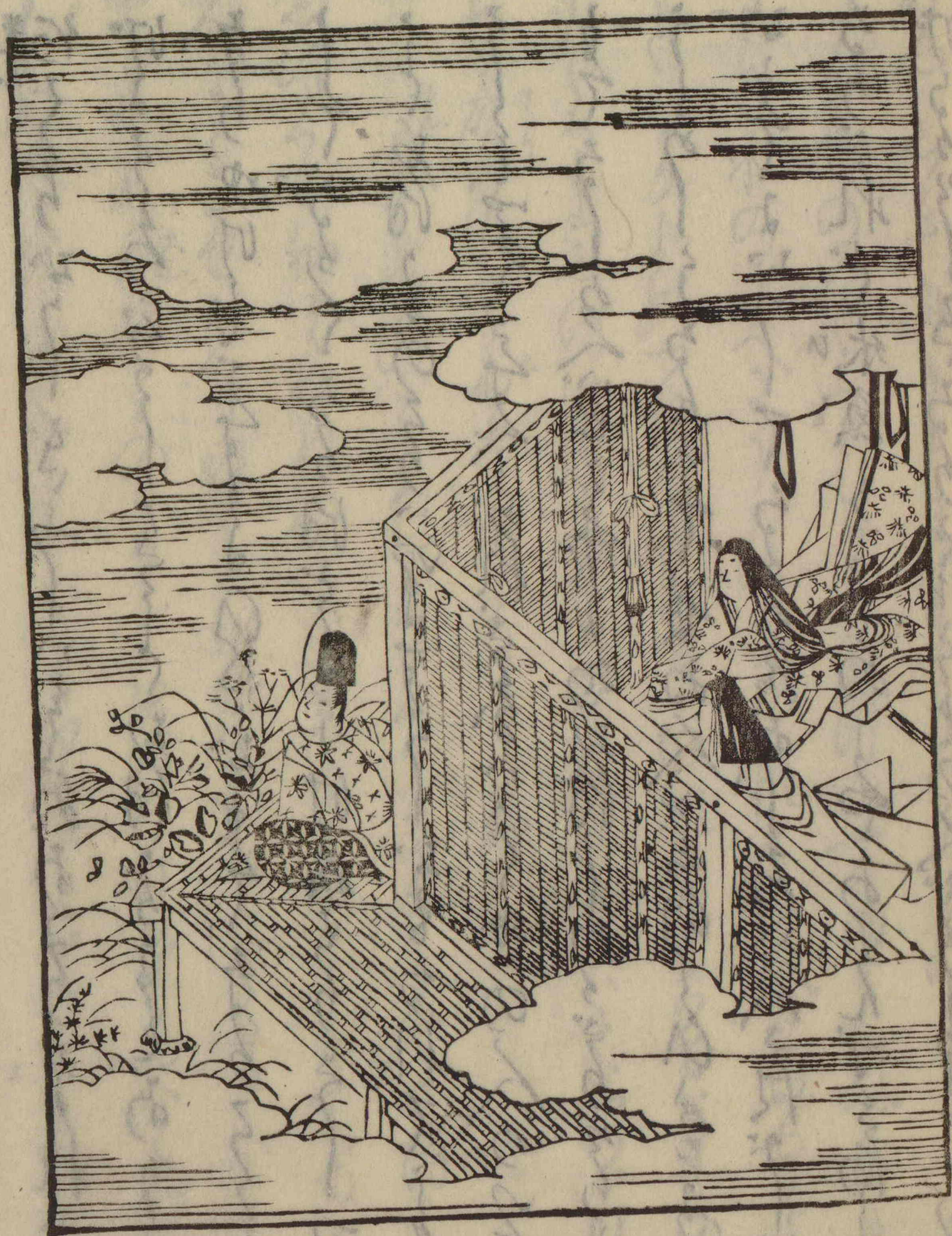
うれしきありは侍る後まぐさまはおぼれたる河
まられてえこそ罪しさせ侍し○とうちつるくく年
女ぶとくはいらじく地がるしとせんり 業人 おほうるこうぐ
すぎたる人ハ涸まろたるまれとはみきくたまへど
いとかうしもせんるもあやしうなりまて 詞 家は
かくまいることはたびかきなりぬる後かく衰しるも
あへる人もなくてこそ家けきこうちの程はひさり
のこそほちつれうれしきついでなるなどとか
のたひ給そうしとのたまへだ 弁詞 うるついでしも
侍しじうし文侍るとも東のまれほどしるぬ
命のこれはべきまもも侍しぬどさらばこうる

ゆゑ此世を侍らうとがりしろしめされ侍らるん。
三条の家（女三）まさふしひし（女三ノめのとの女之）に侍従を。かゝるくなり侍ま
けりと泪のうまきて侍し。それかゝむつまりしこ
しひゆへし。おろじ程の人ほくうを侍まけり。
世の末まにそうかるせかいよりつゝとりまうで
こそて。此女とせ六とせの程なん。これまうくさふしひ
侍る。えしろしめさじ。此ごろ藤（とう）大納言とゆるゆ
れこれかゝの澎（柏木）雲（かこ）まてかれ侍ましは。もれく
つゝでなどまや。彼れうへとてこそしめしつゝふる
ことも侍らん。すぎにのてゆくもへぐらぬ。ゆち
のうし侍る。それなりのうしさも。まぶ袖のかゝく

おり給はず。おもひのほかなることぞさおりてぞん
給ればかくおろかにもてなさせ給はずけれ。まよひの
ほども憂のやうなるんが。これおに権(ごん)大納言のれ兇
のとまり給ひしとき。弁(べん)が母まぢみん給ひし。能文まつり
てまつりける給ひけり。人くまでまゐりも給ひぬ男
なれども人まゐりてこれをばかれこゝろうくさおもはりける
ことにおりくうちかすめの給ひしと。今はかぎりま
なり給ひしは病(やまひ)のとおもひつゞけめしよきていさくら
の給さくことなん給ひしとぞおぼしめすべきさゆへなん
一こと給ればかぎり御出給るまゝのこりなきと
おぼしめすはこゝろ給へばのどかまゝなんなうくしめし

いて侍るべきにつきぐんどもかたらいてくさし
すぎたりとつきしろひ侍めるもことわりにあるん
とてさすがにうち出ぜなりぬ。おや（差ん）もしく憂がたり。
うむなぎやうのもれくとしぎがたりすらんやうに
めづらかにおぼさるれどあれにおぼつるくか
ぼしいたることのすぢ候ことなれだいとあく
ゆかしかれどげに人めもしげしさしぐるにふる
物語にかくづらひて東をありしたてんもこち
うちしうるべかれだ。そ（詞）こそとしひつくことは
なるを物がたいにしへのことにさく侍るも物哀す
なんさしぼうるしぎこれありさうせのへ。勢（きり）もれ

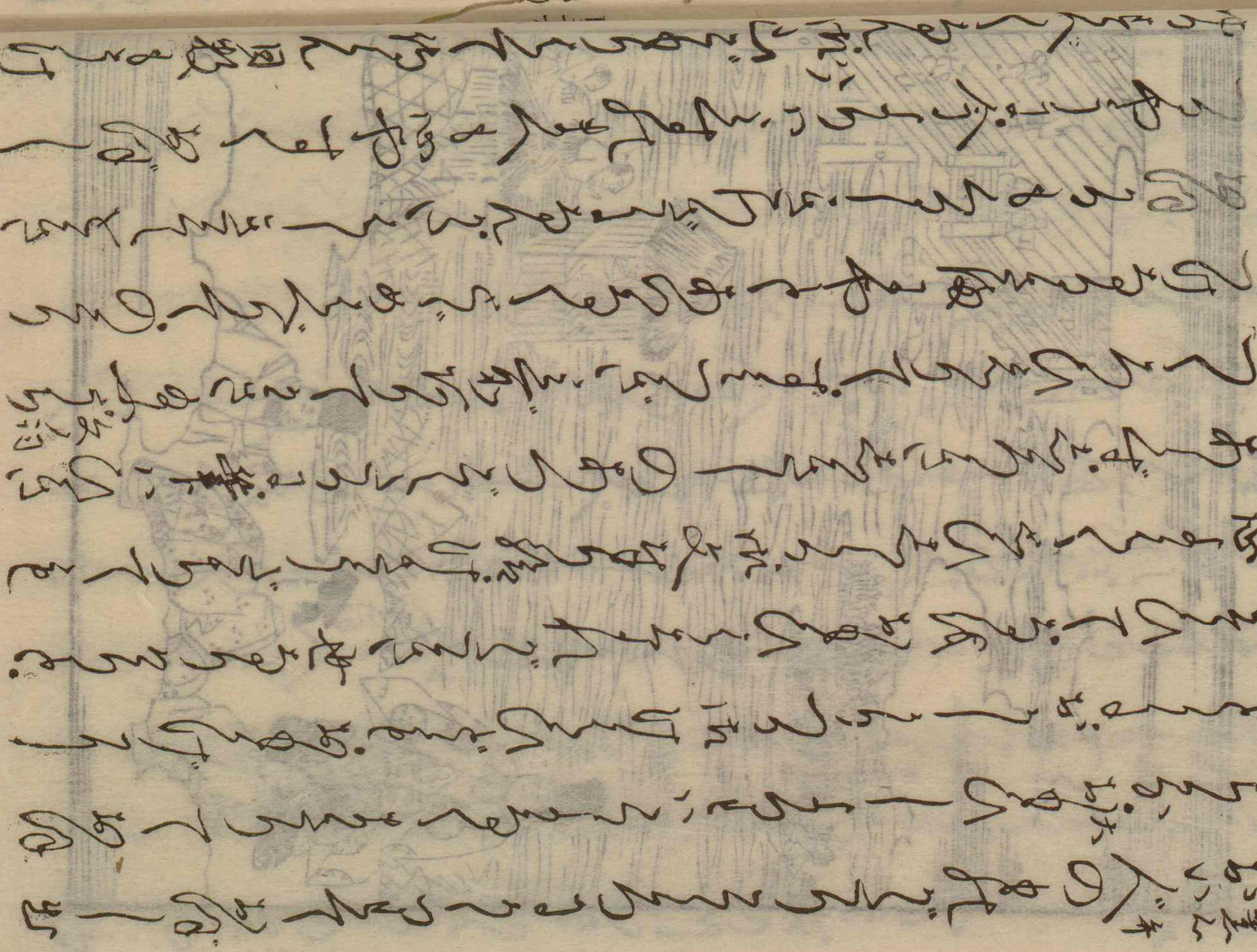
ゆかばたしたるかんべきやつれをおもるくれら
んじとがめられぬべきさ夜なれぐぜひなふ
心のほどよりハくちなしうるんとてこちなふる
芸ハ
れおりします寺の種のしるかするに罪てきり
いとかくこちはれりこれのやへ雲なひやふ
へぞておほく哀なるに行これ姫君こちのれこそ
のうちども心ぐるしうるまごとをおぼしのこすら
んかくいとおくまりこまへるもことくりぞうし
をどおぼせ
芸
あさぼらけ歌詠もそぞれこしまま乃
お山もこさりこあてぞり心ぼそくす侍るれとこち



もぐらおりしきつうハこゝめあそうみすれど、
げるころぐらしきとくおほろまともおうう
そらゆけじさみすゞるひさいおもそそすおろこうち
してゐるかくちまはどゐうけ給ちうさうしつゝ
ことおほうろのそりいはますうしおもゐれてこそハ
うそ又もすべろめれさるかいうくせの人めそ
まそちうしある人ハむともずるま恥おぼしけうずうそうと
うるめしうちんとそ夜ねんがありひさうて
おもてまおりしてゐすめ給おもしろいんさげげ
ありされど氷魚もよるぬまやおそんずさ同じ
げるうりしきちりとれともの人ぐさしつてそハ

あやしき舟どもに来(しだ)りつゝとれくちまと
なき世のいとなるとどもまれかふき面どもれどもう
なき水のうへにうかひたるこれもしんぞおるじ
どもなりよれつねなきなりぬれいうかぶこまの
うてなるにしげけきしかとしてべき世かいとしつぐけ
りの硯(すり)めしておなしまきたる給
(笠)へし姫のころとくとてこうをさすさほせん
しげくる袖ぞぬれぬるゝなるがめぬんしとて殿ゐ
べにもしせかりいとさむげにいらくぞこうかし
てもて来る(大心)風西かこのかなどおほろけなるんいとづか
しげなる風どもさとしてかかるありいとて

×さしかへるさ浴の川おきあさ夕の衆(おづく)や袖
とそうしろうらん。あさんうさてといとおかし
げまうきぬへりまはまめやすくもれし給はりと
心とまりぬれど此車ぬてまりぬと人ぐさハがし
ゆれば夜ぬ人どうりをめしよとてかへり(慧詞)ひらせ
給ふんはどまうるすぎまりべしうどの給ぬれさ
此ぞどもハこれこれ(夜の)人まぬぎかけぬて(京へ)とりまつかハ
しつる此ぬ代しまもりへ川



蓋ん弁
おいぐんの事れがこりこころまかつまておぼし出
らるかお大ゆひしよるといふこゝろまくまたりておぼ
とうまおかしうりつゝ法けたひどもおもひげつり
そひてなほおもひこゝろまれがこゝろ世なりそうと
心よくこゝひしたる此文なり給けきうごちてを
あしぎしたるきしたきしのあつぞこゝろは筆はひき
つゝろひえりてすこつぎこゝ形なりてきさまふぞう 文ノ詞
つけなるき後まやとあつるくさゞめんべりてのこり
ゆゑるもくるしきけぎるなんがこくしきてとき
つゝやうは今よりはこゝすれまへも心やすくおぼし
ぬるとくるんれ山ごもりちて作んん日数もうけ

給たりをきて、いぶをかりし務(きり)のまゝよひもたるけ
ばたんなどぞ、いとすくよかまかさゝかへる者をのぞう
なる人は使(つひ)まで、これおいぐ(年)へさづけてふこもさしせ
よとの給、屢ねぐかさむげまて、海よひしなど、
衰(蓋ノ)まおぼしやつまて、おほきなるひまりごやうの西
あまるをきせ給、又の日、これは寺まもなり給、やま
ごまりの僧どもこれどものあらしまいとこゝろ
ぼそくくるしからんを、さておいします程のふせ
まふべからんとおぼしやつまて、きぬはなどおほ
かりかり(八ノ)はとてなひたまて出給あしたなりそれば、
をてなひぐどもまはるきぬけさころもなど、すべて

一ぐりのかどづ。おんうぎりのだとこうす
こまふ。夜升ばかれれぬぎすてのえんにいらじき
りのれぞどもえちゑぬしろきあやのれぞ乃。
ちよくといひしらぎよ目へるをうけしまて。
男をとる。えうへぬもれるれがよけうくしうぬ袖
のかぼ。人ごとまとがめられめでしるしなん。中こと
しろせうける。こころにまかせて男をやもくも
三 かるまれぜ。いとむくつけきまで人のおどろく
まかひとうしちひてがやとしへど。重きさ人もれ
うつりがまて。えもすくぎすてぬぞおまりちるや。
蕉ん 大
君ハ非君のれもすいとめやすくらめうしまぼ。

なりしく三絵ハ三やまもうくれせうそこありさなど
人ぞ笑しさせれんぜさすれば八羽ぢまはけさう
ぞちてもてちい絵んも中こうしてあらん例の
ワうどにまぬれころだへちゆるぞちゆらんのち
もなどひとことうち目のめしてしぞさやう
まて心ぞとめこんちなどの絵なり此こげうも
さ面ぐのれとふひの山のいちやまあまるもし
ことちどのこまへなまぢうでんとあばして三の家
のやうまおくまりこんあらりのこまきりをん
こそあしうべそれとあらましごとまぐり
のこまふ物ぞこそしたげまして此ころさんがし

をしんとおぼして、のどやかなる夕暮にまいり
まゐりれいのさ海ぐるるれ抱がうりをさしうらし給
つゐでに、宇治の八ゑやのことくうりいでくらしあり
月のありさ海をまどくくしく罪し給に、宮白ゐいと
きちにおうしとおぼいたり、薫ゐされだまとれなしきさと
こそ、いとぐれてろうどこあべくいひつゞけ給、さて白詞
それありけん也こと、冥まどかこせ給はざりし、丸まろ
なるまゝしかぐどうしこ給、薫詞さりし、いとさ海ぐれ
らんずべかめるとしをどうにこせ、さ海ゝ思、かまん宮治
いたりはうくいとも、むもれたる男にひきこめて、
やむべきけしひにも待しねば、なるまず、れ給しぎき

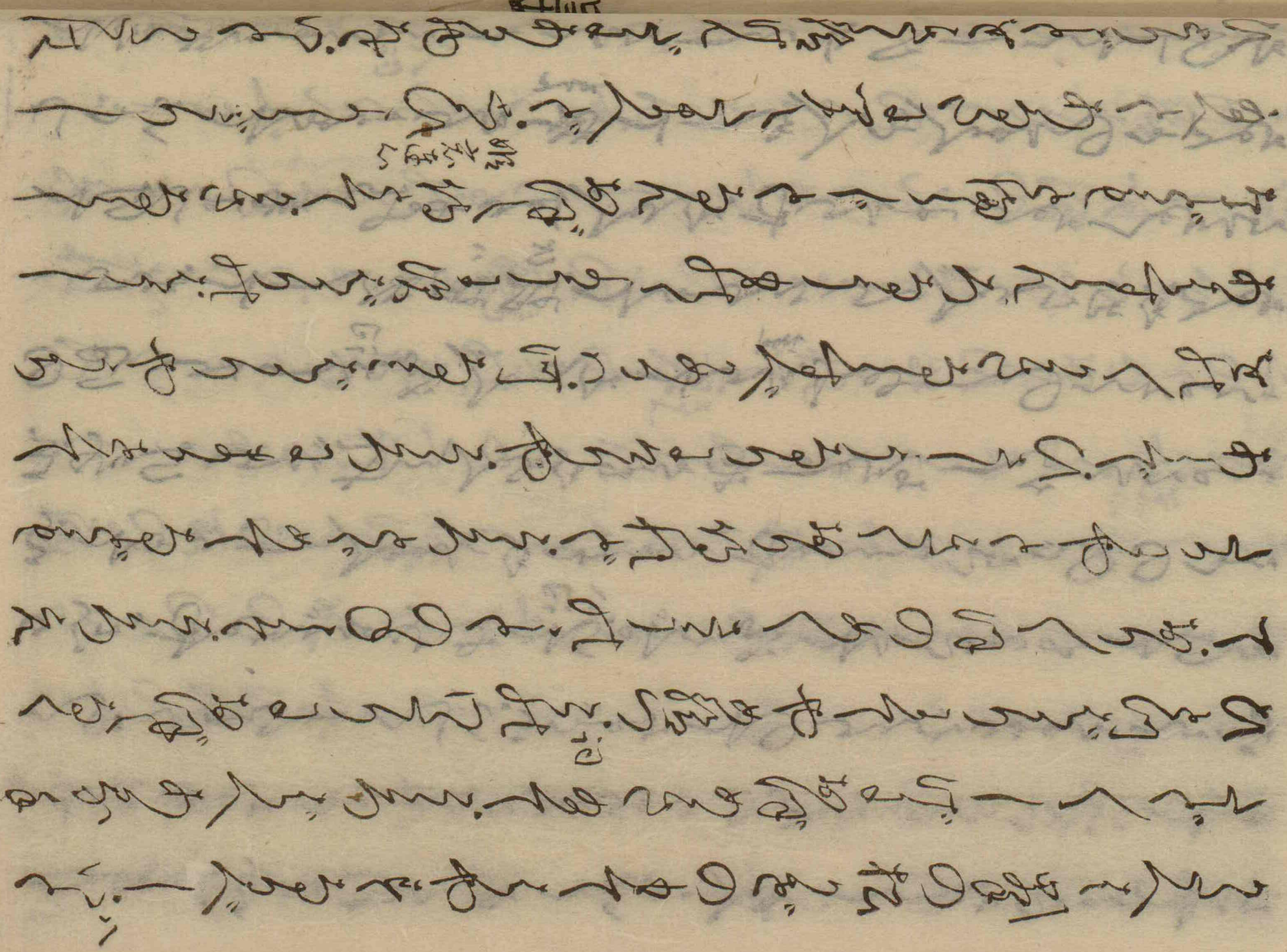
せぢやと出なれどいかでかうぞのよせめべき
かやすきほどこそすかまほしくいとよくすきぬ
べき世に侍れうちうくろへてあほかめかれ
さうかこに前ありめべき女の相しきうち
出のびこうすこうも山里めいこうく夜などまをの
けうに侍べかめり。これをこそしたすけうりもいと
うづめひだりざ夜にてこうちくしうぞあらんと
年比思あかづり侍てこてとぞこそそぞめ侍ら
ぞりかれほのうちなりしは親のことをとりきずも
まほなるんもやけもひ女猛もこさぐりなるんとぞ
あるまほしき程とあぼし侍べきなどをこそしぬふ

白ふ
ひそくいまめぞちてひとまくぬぼろけの人に
心うつりまじきこんのかくかくぬもへるを、とろか
ちらじとゆしうぬぼしてとうざりなくなりぬぬ。
初 又こよくそしきこゝぬへと人とすくめぬてかざり
あるれ男のほどれよくるけさ紙、いとくしきまで
心もとなしとぬぼしれば、おかしくて、いでやよ 董ふ 初
しなくぞ侍、志げし世中に心とだめじとしひぬへる
やうある男にて、なる紙ざりどもつくましう侍を、
心ちがうかるもぬ心つきそめちはぬほうるしひに
こぶふべきことなん侍るべきと思へたまへだ、いで 白初
わかとくしれいのいどろくしきひぢり

と葉ことそてくしがなとそてけらひ給ぞろのうち
まはかれかるゞへのほのめしくすぢなまどのいとゞ
うちなどろかされて。それ衰ちまる。かりしとこゝな
ともめやすしとさくあらりも。何ぐらり心まま
とゆらぐりかり。十月まちりて。文六日のほどり
葉 字治へまうで給。おじろ紙とそれどろいかんぞ
めとこゝろかるへ。ぞあれど。ほかはそれひとむしま
あらそふ心まて。おじろまもらんとそざすて
のてかろうなあじろ車まてかうりのなをし。さし
ぬきぬりまてゞとさらびのへり。八 宮うちよろこび
のて。前まつけらるれあるゞなどかしうちるし給。

くれぬれば、ゆほとろぶしちりくそ、さきぐさしゆへる文どものふるさなど、おぎりもさうじ、ゆろ志て、ぎ義なまどいたを給、うちも夜どろまず河風のいと、あらましさる、末柴のちりふをとゝ、水のひぐさなど、衣もすぐて、ゆそろしく心ぼそき所の夜なり、明（蓋ん）ぐらくなりぬらんとさふ程まありし志のくめ、ゆもひ出れて、琴（きん）の音此衣ちることゝ乃ついでつくり出て、さきのこび、霧（きり）ままどもされ侍し明ほのよいとめづらしきまれく音ひとこゑうけ給ふりしのちりちん、中こまいといぶりしう、あらぎ、ゆもひゆへくるくなど、アカし給、八詞、衣をもう紙も

あぐねもひぬへくるなど思ひ給ふ事をもかれ思ひすてくしけぎりしきくしことをもえれ思て
なんとのたまへど人めして琴（きん）とりよきて いとつ
きなくなりまとりやむるべすゝ事ゆへ書をつけて
なんぬ出らるべからとて琵琶（びハ）ぬしてまらう
とるそぐのしぬふ（筆）とりて志しべ給ふ（詞）さしたり国の
なるきく給しおなじ抱ともむぬへられざりけるれ
ことのひぐきかうまやとうそむさまへしがとて心
とけてもかきこそ給ひぬ（八詞）いであなさがなや志か
れらくとまるだらりのてなどいいづくよりもかく
もでいつこそりえんおうまじきれことなりとて
きまかきなるしぬへるいとあれは心すぐし



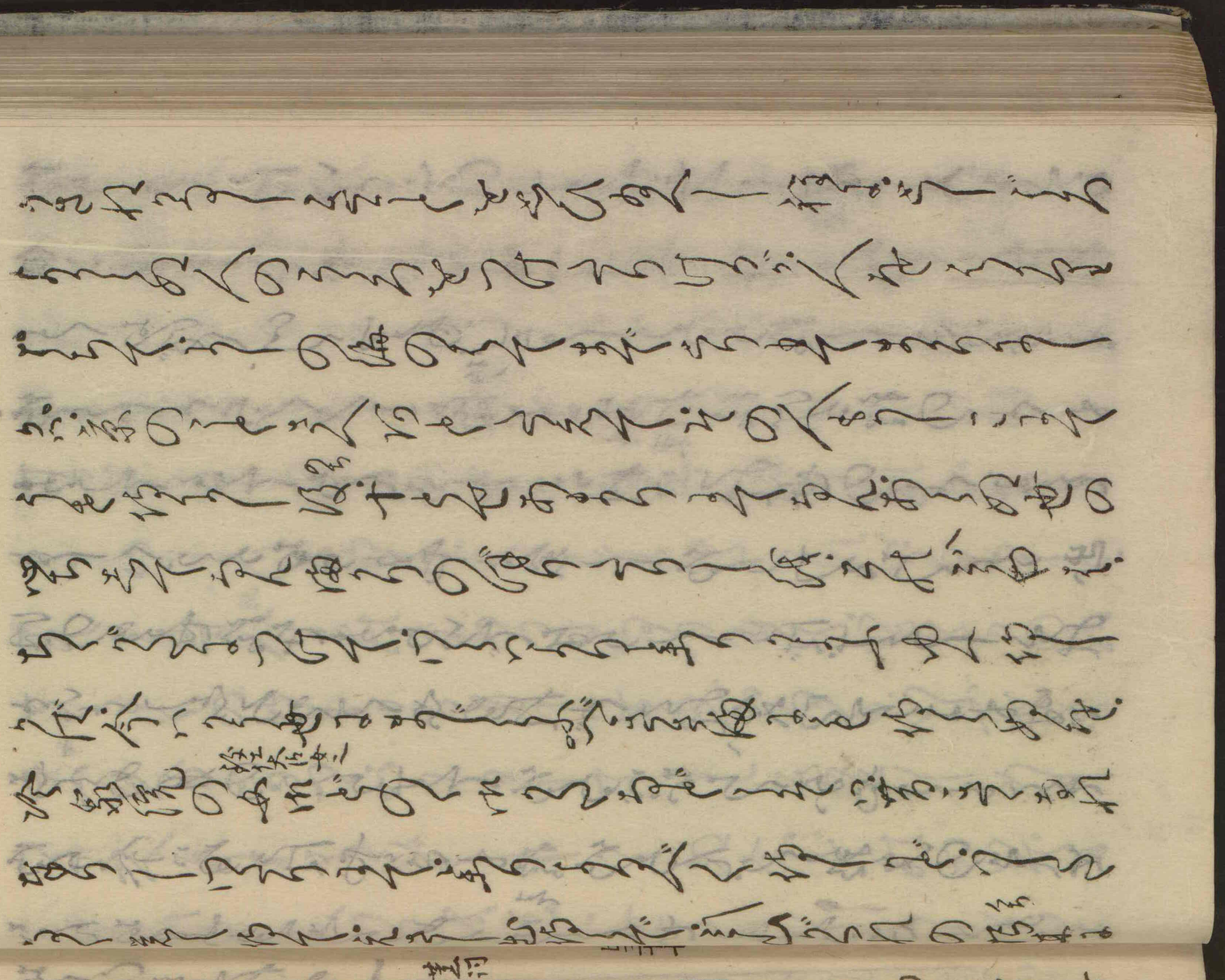
ちゝんとひきいりつゝ。これにて給ひぞ。八ノ ぐびく
そぐのし罪しなへど。昭光達 とく罪しきまひてやん
なぬめれば。蓋山 いとくちおしうおぼゆ。八山 それつゆでまも
くあやしうよびぬしひやまてすぐを有様
どもれ。ぜひのほうるうことなどくづしうおぼゆ
ま。詞 人まぐるいでしらせじとくぐゝすぐをど。
けふあすともしらぬ力のありすくなさまさすぐる
り来と。昭光達 人はおちあふれてさすへんこと。
これのこゝそげる也をもなれんきいのほぐしなり
それとうちくひなへば。蓋山 心ぐるしうゝなりなふ。
詞 ひぎとのれうしろゝ。たゞぐしさすぢる

伊ぎともうとくしうぎおぼしめされむと
なんしひぬる志ぐしもなぐしへ伊ん命の程ハ
ひとこともかくうち出ぬしきをてんさ海をうぐへ
伊るまじくなんなどやぬへバいとうれしきことく
おぼしの給さてあるけきぐさ安のれをこなひ志給
程ハ荒おいべめし出てあひぬへり。ひめ君志れ
うしろミまてさふらせ給。井の君とぞいひける。
年ハ六十ますそしらぬほどなれど安びかる
ゆへあるけるひして柏たまどきこ也。右権大納言の
君のよとくもる柏をしひつ。病づきちるくなり
給ふし方法を罪し出てなくこと限なし。げによその

人のうへとはうんどうに衰ちうべきかうことぞ也 紙
まして年比おぼつかるまくゆかしうぶりあり
とのうじめふりと佛まもろれこと紙さぐり
しらをぬへとわんじつうしうしまやうくゆ先の
やうに衰ろうぶりをおぼしぬついでつりこそ
つけつらんとおぼすまうぶとぐ先がうりり
詞 さてもうくそれよれ心しりうろ人ものうりぬへり
けり紙めづらうまもうづしうもおぼゆること也
すぢに稚くいひつかうさぐひやまうもあらん
らしどろかけても字をしばぐりけりをとのぬへだ
年詞 小竹須と年とくろちて文しろ人侍らじひとこと

まても。又こと人にうちまゐびけるぞ。くもれくり
なく殺(ゴ)なるぬ男のほどに侍れど。よろひるり(柏本)れ御
げにつきなりて侍しかば。をのづからものゝ事色
をもこなりそめしに。れ(柏ノ)心よりあまりて御ほし
けり時ぐ。こゞふたりの中になんと。海さられ出せう
そこのうらひも侍し。うたくらいたかれば。くらしく。
まてさをぞ。今(柏)それとぢめるなりまて。いさくりの給
とくこゝの侍しうら男にはをさ前なく。いぶせく
ふぬへつたりつ。いかりしてかんをさしめし
つゝふべきと。とうぐしからぬ念ぞれついでな
もおもひたまへつる後。仏は世においしましからと

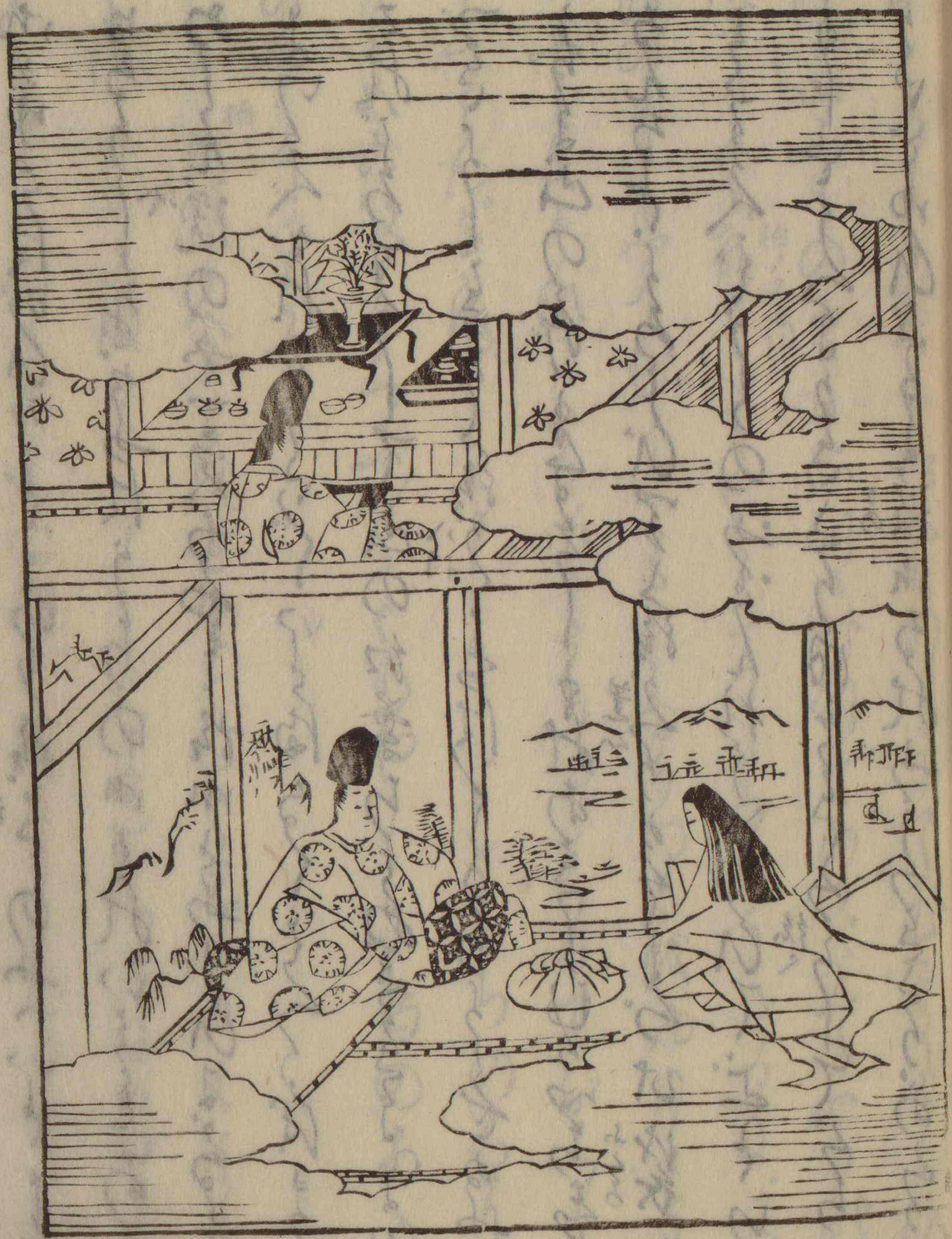
もおもひたまへつる後。仏は世をおいしまいらせ
なんおもふ人をしりぬる。ぬらんぜさすべきもれも
侍り。今はゆゑはやさも捨(まそ)侍るんかく朝夕のさしを
しらぬ男のうちすて侍るべ。おちくなやうもこそ
といとうしろめたくしおもれど。これ(ハ)父ひたりまも。時ぐ
はのめ世給はまちいでなりしかば。すこしこれ
もしくうかりもやと念じ侍りつる。ちから出
まうでさてなん。さしまこれは。これ世のことまも
侍らじとなくくこ阪なる。生れ(うま蓋)給ける程のことも
よくおぼし(柏ノ)しつるむちしうなり給しさいぞる。
母は侍し人はやがて病づきてほどもへどうくれ
侍りましかば。いとこひしたまへしづこ。藤(ふぢ)ぞろもしら



なく見て行て見さしむ行ぐ[illegible]

ありまて行ゐるり小行後（業詞）くいけかうせ行まけん。
そ此（弁詞）ゑのけるざりと三行し人ハかずまくなく
なり行まけり。東の世まおほくの人まとゝく命を。
なましくしぬへてしそ。さすがまめぐひ行れるど
ゑきゆり行まれいのあけてそめ。よし（業詞）さらバこの苦
物後ハつきすべうるんあらめ。又人きゝめ心やまきさ
ところまてきそん。行後といひし人をほのま
おぼゆりハいけしひけぐらりなりし行まや。織（まハカ）ま
むねとやうてうきまきとなんきくうろこいめん
なくハつきとまきまてきめべりけることなど
の給。さぐ（弁）やりまをしまきあらせらほぐ（反古）ぜの

うびくさ紀とぶくろまぬひいれうちり出てなるが
詞おまへまてうしなるをのへ紙柏ノ紙いべくもあらず
なりまうりとの給ふをそこれ此文とうりあつめて
給ふをうりしかば小侍従ま又あひミ給ふんついでま
さぶうまつるへ来らきんとさひのへしをやがて
副給りましもぶくしごとまはあらずうるしう
なんさひのふるとこそ也。芸つれなくてこれをくい
給つかやうのふるべいどはどがうりまや。おやふさ
ことのうしまいひ出しんとくしくいぼをど。
今返てもちらさぬよしとちらひつる。さをやとまる
ゆきひこぞれぬふ



荳
れゝゆこはいひなすぐまつり給ふ 詞 のふへいとまれ
日ありしをそふはうちのれまれいとあき
めしん 冷 院の女一宮なやこ給れとふしひまゝるず
まいるべきれどうらぐいと後なくとぐる後まる
それどろすぐして山の紅葉ちらぬさきまいる
べきよしきこえ給ふ 八詞 くしばくこちらしせぬふひ
うる山のげますそしまれあきらむらぬちして
なんなどよろしび罪ゝ給ふ 荳 ぐりなてまづ此 ふくろ 袋を
こゝまへぐうらのふをんれうとぬひて上といふ
ゆじとうへまかきこゝろ 徒 ぐ してくちの
うゝとゆひこゝる 後 のれなれふうつきこりおくりも

おそろしう見て絵色のうまそむさまかひ
けるれふまの色もいひしむひぞあるさそいかれ
れてまて病（柏ノ文ノ行）ともくかぎりまちりまちるま文
ほのるまも罪しむことくるくるりぬるほゆりしう
さふことはそひまたりれかたちもかたりておもし
ますんがさ海ぐかるすしきことをこちのくり
がこの六数ありつぶくとおやしき鳥のあと
のやうまかるまて
（柏）めれまりへまこれ世をそむく君よりもよそ
まつりくこ海ぞかるすしきこまるこそしまめづし
くきくまべる二葉（ぞ）のほどもうしろめたりも

ひのかゝるにハなけれど

拍
いのちあらばこれをもみまし人知れず岩ね

にとめし松のおひすゑもさしくらやまにいと

ながらしくそ御法の花にこゝろ入はいとさつけ

うち志きんといふ虫のすそうにありて哀ふかめさ

花のかびくさくるゝしおと八きこしすゝいまうき

きくん花も音もさくめ色の葉どもの色殷くと

落る露と玉と結ぶにおちてもとるまし哀く

うしろめたうハなどかなしくどもあるらこと

世になるもあさんやと思ひとりいつかみれちし

さくえひて涙へ落ちんとみはしつゝも尽かぬれど。

69038
6 Ap 78